

政権交代のある政治：その必要性と困難

政治学者 杉田 敦

安倍政権は、憲法53条の規定にもとづく臨時国会開催要求を公然と無視したり、あるいは従来の憲法解釈と矛盾する解釈を恣意的に示して安保法を策定するなど、立憲主義の原則に反する政権であった。独立した機関として憲法解釈や法律の整合性を保つ役割を果たしてきた内閣法制局の人事に介入して、これを沈黙させたり、内閣人事局などを通じて政府に対して異見を述べる官僚を排除したりするなど、時の政府の方針を上から一元的に貫徹させる、きわめて集権的な体制をつくり上げた。安倍政権に代わって登場した菅政権も、発足直後から、日本学術会議の会員任命拒否によって、憲法23条が規定する「学問の自由」に正面から挑戦する姿勢を示している。政権担当者が変わっても、基本姿勢に変更はない。そして、前政権時代のさまざまな疑惑や、コロナ対策などの失政について、検証が行われる気配は全くない。

こうした経緯を見ると、政権交代の欠如が、政治から緊張感を奪っていることは明らかである。憲法の大原則を無視したり、違法性の疑いのある恣意的な行政を行ったりしても、自分たちが政権を握り続けているかぎり、それが問題になることはないという政府一与党はタカをくくっているのではないだろうか。また、官僚にしても、近いうちに政権交代があるのなら、勇気を出して政治家に物申すことができるが、その見通しが必要ならば、黙って従うようになる。学術会議の事件をきっかけに、大学などの研究機関でさえ、政府の方針に異を唱えると何をされるかわからないという不安が広がり、「国策」に沿った研究しか行われなくなる危険性がある。

それにしても、なぜ日本では本格的な政権交代のシステムがなかなか根付かないのか。90年代の「政治改革」が思ったような成果を挙げられなかったからだ、という議論がよくあるが、私見ではむしろ逆であり、現状は「政治改革」の直接の結果なのである。

そもそも二大政党制というのは特殊なシステムであり、それぞれの国の歴史の流れの中で、たまたま二極的な対立に整理された時に成立するにすぎない。かつては、地主の利益と商工業者の利益とは対立する傾向にあり、英米の二大政党制にも、そして戦前日本の政友会と民政党との間の政権交代にも、そうした面があった。その後も、経営者の利益と労働者の利益との対立という二極構造になった国では、二大政党制になっている。

他方で、英米と同様に民主主義の歴史の長いヨーロッパ大陸では、二大政党制は一般的ではなく、むしろさまざまな政党の間の連立の組み換えによって、政権交

代は起こっている。

戦後日本政治では、自民党が、財界の利益を中心としながらも、農民を含む幅広い層の利益を代表する「包括政党」として政権を担い続け、農業人口が減少して地方の支持基盤がなくなると、小泉政権が都市のサラリーマン層に支持基盤を移すなど、常に、有権者の多くの部分を取り込むような方針を採用してきた。このような政党が真ん中あたりに強固に存在すると、野党は自民党よりもさらに「右」に行くか「左」に行くかしか選択肢がなくなり、いずれにしても、なかなか多数派を握ることができない。

「政治改革」の推進者たちは、こうした日本政治の基本構造を無視して、選挙制度の変更だけで二大政党制が成立するかのような幻想をふりまいた。その根拠となったのが、「二大政党制の国は小選挙区制」という、政治学上のいわゆる「デュヴェルジェの法則」であるが、これは、「二大政党制になっている国は小選挙区制が多い」という「必要条件」を言っているだけで、「小選挙区制にすれば二大政党制になる」という「十分条件」を言っているわけではない。現実には、選挙制度以外の諸条件もはたらいっている。

しかも、小選挙区制というのは、(勝つ見込みがない)小政党を排除する効果をもつが、結果として二つの有力政党が残るとする根拠はどこにもない。非常に強力な政党が一つあれば、二つ目の政党も育たなくなるのである。自民党という「包括政党」の存在と小選挙区制とを組み合わせた結果、現在の日本で起こっているのは、まさにこのようなことである。

それでは日本で政権交代が起こるようになるにはどうすべきか。「野党の奮起」、「新たな政策の提起」など、いろいろと「建設的」な提案もあるだろうが、私自身は、短期的には悲観的である。民主党系は、野党内対立を整理することで展望が開けるかのように主張しているが、現実には、自民党の分裂を伴う政界再編がなければ、多数派形成まではなかなか難しい。しかも、権力維持を自己目的とする自民党内には分裂する動機がなく、石破派のような党内批判勢力さえ消滅しつつある状況だからである。選挙制度の再改革も、必要であるが、その動機付けが与党にはない。

なかなか厳しい状況であるが、冒頭に述べたような今の政治の強権的な性格(それは、「包括政党」による戦後保守主義が持つていた一種の「度量」を失っている)が、人々の支持を失った時に、何らかの「可能性」が見えてくるのかもしれない。

(すぎた あつし)